

巻 頭 言

東北大学学長

西 澤 潤 一

最近、科学技術の進歩がその要因と考えられるが、医療技術や考古学などの使用機器が目覚ましく変わり、それに伴って手法が全くと云ってよい程変化したようである。

しかも、そのきっかけとなったとも云える X 線コンピュータ・トモグラフィは、その原型として本学卒業生である高橋信次先生の御業績であるとするのは、我々同学の者にとって大いに責任と誇りを感じることではないだろうか。まして、石田名香雄先生に伺うところでは、高橋先生の御業績の基礎的な部分は本学に於てなされたものであると云うことである。

いささか手前味噌な発言と云われるかも知れないが、医療技術の近代化は、本学に於て始まったと言うことも出来よう。正に、これを受ける医療短大の責任は他の医療短大と異って大変大きいと云えるのではないだろうか。

東北大学医療技術短期大学部の紀要は、以上を受けた教官の着実な研究成果を取り纏められたもので、現在のところ、地味ではあるが、充分評価出来る豊富な内容を持っていると思う。

そしてまた、地味だと思われた成果が、暫時の日時が経過した後になって、或る日突然その輝きを発する日があるのではないかと期待をもたせる論文も、いくつかあるように思われる。紀要の発行が、もう少し早くてもよかったのではなかろうか。

扱、医療技術の急速な進歩が科学と科学技術の急展開によって齎されたものであることは前述の通りであるが、元来、医療は人間の精神活動に負うところが非常に大きいことは敢て申すまでもない。これが医療機器の革命的導入によって減少すると考えるのは大変な間違いである。

人間の医療には当然人間の心と身体を通した介護が必要であり、機器導入による肉体労働の軽減は当然期待出来るが、高度の機器程その使用には細心の注意を必要とする。若し使用の方法を誤まれば、高度の機器程、そのときの被害は大きく、患者に与える打撃も、従来の単純な機器と比較にならない程大きい。よって、これからの医療に於ては、機器や科学的治療方法に関する深い理解を持たねばならないし、そのために必要とする基礎学力の量は莫大なものになりつつある。そればかりではなく、実際に機器を使用する方法や、その条件によって治療効果も大巾に変化するものであって、十分な実施例を集約して効果が如何に変るかも予め確認しておかなければならない。大量の研究成果が必要である。

また、医療に当てる患者や看護者の心理的、肉体的影響も、十分に研究して機器使用をバックアップする基礎としなければならない。偶々、感性の世界に科学の手法が導入される風潮が増しつつある。従来、科学と相對する、いわば非科学とまで考えられた感性の世界に新しい風が吹きはじめている。人間と科学の二つを不可欠要素とする医療に新しい風の吹き込む本紀要を期待して創刊を祝いたい。